炊事などの日常の雑事に苦労を惜しまない「薪水之労」の思いで、2012年に建立した稽古場兼劇場「薪水書窓庵」。芸の道で一人前になるには骨身を惜しまず人に尽くし、人間性を高めることに重きを置いている

特集　次代を担う人形芝居

つなぐ伝統　芸の技

稽古に励んで芸を磨く三味線歴7年の高橋葉月音さん

市重要無形民俗文化財「沼須人形芝居」（沼須町）は、江戸末期に伝わった人形浄瑠璃です。1955年ごろに一時期途絶えましたが、75年に地域住民が保存会を結成して復活。保存会の上演部門の「あけぼの座」が後継者を育て、公演を通じて伝承しています。

真剣なまなざしで三番叟の神様を演じる堀越美羽さん

沼須人形芝居は1人で操る「一人遣い」で、人差し指と中指の間に人形の頭をはさんで動かします。黒衣をかぶった影遣いで、三味線と義太夫語りに合わせて人形が演じます。座員は小学4年生から87歳までで、中高生と大学生が半分を占めます。

公演の最初に演じる「寿式三番叟」は、五穀豊穣と地域安穏を祈願する祝儀の舞。地元・沼須の農村地帯を想像しながら、鈴を持って鼓舞したり田んぼの足踏みや種まきのしぐさをしたりと、リズミカルに動きます。「一緒に踊ろう」と客席まで足を運ぶこともあり、座員の堀越美羽さんは「お客さんの年齢層や表情を見ながら、元気づけたい思いで人形の気持ちになりきる」と話します。演目の終了後には「皆に幸あれ」という思いを込めて、団員が客席へ向かってお菓子を投げて舞い納めるユーモアある出し物です。

1

3

2

1.「壷坂霊験記」で、盲目の沢市と妻・お里を演じる 2.三味線に合わせて語る 3.公演終了後に客席へあいさつする

頭の数は全部でおよそ35。約200年前のものも大切に保管され、今でも公演で使っている

堀越すずはさん
―戸鹿野町―

18番は意地悪な船頭役にはまった所作を披露

小学2年生のときに姉と一緒に入団しました。デビューは「三番叟」の田植えを演じる早乙女で、言われるとおりに動いてやりきったことが懐かしいです。

18番は王位継承争いを題材にした「日高川入相花王・渡し場の段」の船頭。思いを寄せる男性を追いかける主人公「清姫」を阻み、断固として船を出さない冷たい仕打ちをする役で、自分の顔まで意地悪になるほど役に入り込みます。語りと三味線を聞きながら集中し、他の座員の練習や動きからも学んでいます。

来春、高校を卒業して県外へ進学する予定です。帰省時には稽古場へ顔を出したり団員と連絡を取り合ったりしながら、これからも人形芝居に関わっていきます。

三番叟の公演終了後、客席へ向かってお菓子を投げ、観客の幸福を祈願するのが座の定番となっている